魂の岸辺

北方謙三

魂の岸辺

H56738

講談社

魂の岸辺

昭和六一年六月一〇日　第一刷発行

定　価　九八〇円

著　者　北方謙三

発行者　野間惟道

発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽二―一二―二一／郵便番号一一二
電話・東京（〇三）九四五―一一一一（大代表）

印刷所　大日本印刷株式会社

製本所　大製株式会社

©北方謙三　一九八六年　Printed in Japan
落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。

ISBN-4-06-202829-8（0）　（文2）

話題の長編ハードボイルド

北方謙三の本

講談社刊

鎖（くさり）

借金を押しつけて姿を消した昔の友人が現われた。助けてくれという。借りの重さにこだわり危険な道を選ぶ男の意地。九八〇円／新書版・六四〇円

君に訣別の時を

どこかで泣いてたら必ず助けにきてくれる男がいる……男はどこまで女を護り通せるか？　東北の海辺に燃えた愛の残り火を描く。九八〇円

烈日

男は闘い、男は変わる！　仕事ができ、家族を愛する三十七歳の有能な営業課長が、自分の中のもうひとりの男に変貌した時……。一〇〇〇円

われらが時の輝き

男の絆とは何か？　社内での息づまる抗争、愛人との密やかな語らい。きわどい勝負に賭けて突き進む、元ラグビー部FWだった男。一〇〇〇円

〈値段の表示はすべて定価です〉

初出／「小説現代」昭和61年2月号

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

魂の岸辺

装幀　辰巳四郎

第一章

1

靄がかかっている。

街は薄いヴェールにでも包まれているように見えた。三十メートルほどさきの露地から自転車が一台出てきて、走り去っていった。それ以外に、人影は見えなかった。

川田周一は、パジャマにサンダルをひっかけたという恰好だった。じっとしていると寒い。シュッシュッと音をたてて息を吐きながら、シャドーボクシングをやった。

「こっち来てな、周一」

順子が出てきて言った。髪を後ろでひとつに束ねている。朝早い時は、いつもそうだ。化粧もしていない。そういう時の順子の方が、周一は好きだった。

ガレージの戸が、内側から持ちあがった。開けたのは佳子だった。いつもより濃い化粧をして、派手な緑色のスーツを着ている。自分が出かけるような恰好だ、と周一は思った。

ボルボが出てきた。ウインドグラスを降ろして、青木が顔を出した。

「周ちゃん、いらっしゃい」

佳子が呼んだ。周一はボルボの前へ行った。いつも青木は自慢しているが、周一はボルボが好きではなかった。箱に車輪をつけたように見えて仕方がない。

「どうってことない」

言いながら、計器盤でも覗くように青木が眼を伏せた。黒っぽいスーツにネクタイで、寝乱れたような頭の白髪がいつもより目立った。

「ここで頼りになる男ってのは、おまえひとりになる。あとは使用人だからな」

どこへ行くのか、訊きにくい雰囲気だった。この二、三日、青木と佳子は部屋に籠って深刻に話合ってばかりいたようだ。

「風邪、ひくなよ」

周一は頷いた。

「行ってらっしゃい」

さよなら、とでも言った方がよさそうな感じだった。周一は軽くステップを踏み、ワンツーを出す恰好をした。そうでもしていなければ、寒くてたまらなかった。暖かいベッドから引き摺り出されたのだ。

「パンチは腰だ。腰でタイミングを取るようにしなけりゃ、当たっても効かんぞ」

ボールの投げ方、バットの振り方、人の投げ飛ばし方。青木はいろいろと口では教えてくれたが、自分でやってみせてくれたことはなかった。

「俺の言う通りにやってりゃ、間違いはない」

「わかったよ」

青木が頷いた。ちょっとだけ佳子の方に眼をむけ、車を出した。

ボルボの排気ガスと街の靄が一緒になった。佳子が泣いていることに、周一ははじめて気づいた。化粧が台無しだった。女というやつは、考えるよりさきに涙が出てきてしまうものらしい。

「周一、走るぞ」

順子が言った。後に続いて周一は走りはじめたが、サンダルでは追いつけなかった。順子の姿が遠くなっていく。町内を一周するつもりらしい。周一は途中から露地へ入った。その方がずっと近道だった。

朝は遅い界隈だった。夜は十二時過ぎまで人通りが絶えない。

青木はどこへ行ったのか。ちょっと考えた。順子なら、うまく訊けば教えてくれるかもしれない。

ほんとうに訊いてはならないことだったら、頭に一発食らう可能性もある。拳固でくることが多いので、順子の一発にはいつも警戒を怠らなかった。小学校五年の時から、父兄会に来るのも大抵順子で、その日だけは一発では済まなかったものだ。

吐く息が白かった。もう十二月だ。来年は中学三年で、高校を受験するためにかなり真剣な勉強をしなければならなくなる。

店の門のところに、順子が息を弾ませながら立っていた。いつもよりずっと速いペースだ。露地から近道をして出てきた周一を見ても、なにも言おうとしない。

門はまだ閉ったままだった。家の玄関はちょうど裏手になる。

「行こうぜ」

順子が言った。背はほとんど変らない。体重は周一の方が重いくらいだろう。佳子と順子の母親は同じだが、周一はちがった。

ガレージの前に、佳子の姿はもうなかった。

「なにも訊くなよ、義兄さんのこと」

「なにか、悪いことをしたってわけ？」

「訊くなって言ってるだろうが」

「佳子ねえさんにだろう。なにも言わねえよ。だから教えてくれたっていいじゃんか」

「子供は知らなくったっていいの」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

順子は二十一歳だった。今年の春の成人式にも、着物を着せようとした佳子を振り切って、ジーンズで出かけていった。順子が振袖など似合うはずはない、と周一も思った。

台所で、佳子が朝食の仕度をしていた。周一は、ちょっと後姿を見ただけで自分の部屋に戻った。いつもより、一時間近く早く起こされている。

作りかけのラジコンカーを手にとった。スポーツをやってみせることはなかったが、青木はラジコンカーなど周一に手を出させないくらい熱中したものだ。いま作っているオフロードレース用のモデルも、青木が買ってきてくれたものだった。爆音の調整もできるし、スピードは五十キロ以上出ると説明書に書いてある。これまでに作ったモデルとは、まるで違うようだ。

俺ひとりじゃ無理だな。周一は作りかけのモデルを箱に戻した。このモデルをどうすればいいのか、青木はなにも言っていかなかった。パンチの打ち方など、腰を入れればいいというのは、言われなくてもわかっている。あまりいじくって使いものにならなくしてしまったら、青木が帰ってきた時怒るだろう。

ベッドに潜りこんだ。暖かさがまだ残っている。今年の冬は、まだほんとうに寒いという日はなかったが、朝方はやはりパジャマ一枚では薄すぎる。ガウンは出してあるが、気に入らないので着ていない。周一が欲しいのは、スポーツ選手が試合のあとに羽織っているような、純白のバスローブだった。

眼を閉じた。眠る前に、順子の声が周一を呼んだ。

朝食は、いつも三人だった。

青木がいる時も、ひとりだけ午近くになって起き出してくる。宝石商というのは、単純に宝石を並べて売っているという感じだが、青木は車で走り回っていることの方が多いようだ。

佳子が作る朝食は、いつも決まっていた。ハムと目玉焼とサラダ。それにトーストとミルクティだ。時折、順子が作ることがある。ごはんと味噌汁と生卵。それに魚の干物がなにかついている。

家は、三人に青木を加えたとしても、広すぎるくらいだった。勝手口が店と繋がっていて、台所にいると店の様子もいくらか伝わってくる。

周一は、滅多に店に顔を出すことはなかった。小さな庭にも、出ない。庭は、客が眺めるためのものだからだ。

仲居が四人いる。調理場には田島のほかに若い衆が二人だ。

仲居たちと馴々しくしようとは思わなかったが、調理場の連中とはよく話をした。田島はもう五十になるが、どこかいなせで、庖丁捌きは周一が見てもすごいと思わざるをえなかった。周一が調理場を覗くと、必ず手招きして、丁寧な口調で魚の捌き方などを教えてくれる。

若い衆の口の利き方は、もっとぞんざいだった。一番若い野村など、今年の春に中学を卒業したばかりで、周一と大して年齢も変らなかった。キャッチボールをやるにはいい相手だが、時々勝手口の外で泣いていることがある。

夕方になると、佳子は着物を着る。亡くなった母親の形見だという着物まで入れると、何十枚も持っているようだ。順子は、着物を着ようとはしない。それで、佳子と言い争っていることがよくあった。

「周一、期末テストの勉強は？」

母親の役割りをしたがるのは、順子の方だ。叱り方がさっぱりしているので、周一には気が楽だった。一度、つまらない悪さで学校に父兄を呼ばれた時、佳子が行った。帰ってきてから、泣きながら説教をはじめた。それも、ひどくしつこいのだ。あたしたち姉弟三人は。いつもそんなところから説教ははじまる。青木が家へ来て一緒に暮すようになってから、ずいぶん減ってきた。店の方も忙しい。二十七歳とは思えない、とよく人に言われていた。老けているからか、それとも仕事ができるからなのか、周一は時々考えた。

マーマレードを塗りたくったトーストを口に押しこみ、周一は席を立った。

「質問されたことに答えてないだろう、おまえ」

順子が腕を掴んできた。

「やってねえよ。まだ早すぎるだろうが」

「おうおう、言ってくれるじゃない。成績があがるって自信が、おまえにあるんだね」

「ねえな。現状維持ってやつ。勉強ばっかりやってよ、つまんねえ人間になりたかねえし。遊びも知らない人生なんて、順子は考えられるかよ」

同じ姉でも、順子の方は呼び捨てにしていた。それを咎められたことはない。子供のころからの習慣というやつだ。

「遊びったって、ゲームセンターで補導されるのがせいぜいじゃないか、おまえのは」

仲間がみんなやると言った。ひとりだけ抜けるのは、裏切りと呼ばれかねない。五人。全員補導されて、父兄が呼び出された。身柄を引き渡された時、順子は笑っていたものだ。みんなでやれば怕くないか。スケールが小せえ。

順子の伝法な口の利き方が、周一は好きだった。たまには取っ組み合いもやる。自分があまりに強いことに気づいて、びっくりしたのはもう一年も前のことだ。それまで、順子にはいつも押さえつけられてばかりだった。いまは、取っ組み合いになっても、手加減はしている。

「三日前から、勉強ははじめるからよ」

「五日前にしろ」

「じゃ、四日」

周一は、通学鞄をひったくって外に飛び出した。

2

その男は、通用門の脇にある何年か前の卒業記念植樹の木立の下で、地面を見つめながら煙草を喫

っていた。

「川田の坊ちゃんかね？」

顔をあげた男が言う。いくつくらいなのか、はっきりはわからなかった。白いワイシャツの上に茶色の革ジャンパーをひっかけ、紺のダブダブのズボンを穿いていた。

「坊ちゃんだね」

周一は頷いた。そう呼ばれることには馴れている。田島も仲居たちも、そう呼ぶことが多かった。男は煙草を捨て、きれいに磨きあげた黒靴で踏みつけた。それはきれいに磨かれているだけで、新しくはなかった。

「久我って者です」

男が、丁寧に頭を下げた。

「学校のそばを通りかかって、ちょうど昼休みみたいだったもんでね」

三十をちょっと越えたくらいだろう。声の調子で、周一はそう見当をつけた。

勝手に校庭に入ってきて、そばにいた生徒に川田周一を呼んでくれと頼んだのだ。多田という一年生が、同じ地区からの通学でたまたま周一を知っていて、わざわざ教室まで呼びにきてくれた。

「別に大した用事ってわけじゃない。坊ちゃんの顔でも見とこうかと思っただけでね」

久我が、新しい煙草に火をつけた。板場に新しい人間を入れるという話などは聞いていなかった。そんな話があれば、佳子と順子が話しているのを耳にしただろうし、野村もなにか言ったはずだ。

「もういいんだよ。行っちまいな」
馬鹿にされたような気分だった。勝手に呼びつけられて、勝手に消えてしまえと言われたのだ。なにか言おうと思ったが、青木のことが頭に浮かんで口を噤んだ。
青木が出かけたのは四日前で、あれから一度も帰ってきていない。
男は、周一が生徒たちの中に帰る前に、背をむけて歩きはじめた。
「なんだよ、あのおっさん？」
どこで見ていたのか、大崎がそばへ来て言った。
「わかんねえ。ただ俺の顔を見たかったと言いやがった」
「ふうん。事情でもありそうな感じだな」
「行こうぜ」
昼休みは、まだ終る時間ではなかった。あさってから期末試験で、いまはノートの貸し借りの真最中だ。周一も大崎も、ひとりの生徒をおだてたりして、なんとか数学のノートを借りようとしていた。
「志田が、三年の岩井さんと歩いてたって話、知ってるかよ？」
「岩井さんと？　冗談だろう」
「それを教えようと思って、おまえを捜したんじゃねえか。見たってやつがいたんだ」
「それで？」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com